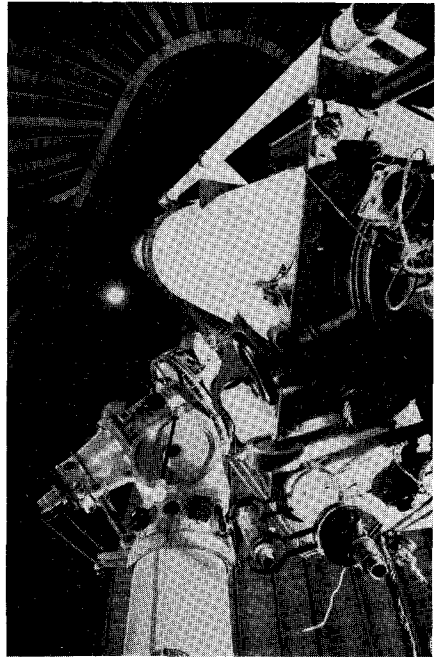


◇ 2月の天文暦 ◇

日時	記事
4 15	立春 (太陽黄経 315°)
6 5	水星 西方最大離角
8	月 最近
16	朔
13 13	上弦
19 7	月 最遠
11	雨水 (太陽黄経 330°)
20 16	木星 留
21 17	望



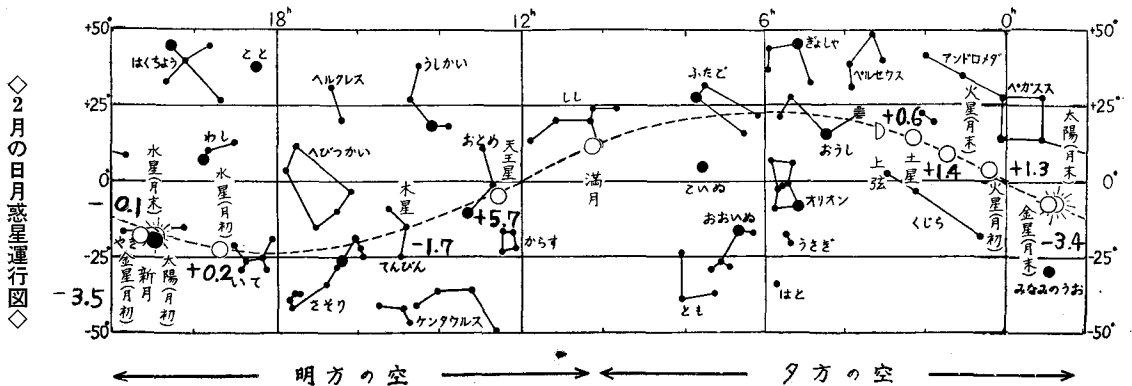
東京天文台 65 センチ屈折望遠鏡

1960年に岡山天体物理観測所の188cm反射望遠鏡が完成するまで30年あまり東洋最大の望遠鏡として東京天文台のシンボルのような存在であった。長焦点の写真望遠鏡である特質を生かして、小惑星の位置の測定や恒星視差の観測に使われたほか、附属の分光器をつけて新星や食変光星の分光観測も行なわれた。

戦後は光電測光装置がとりつけられ、掩蔽の観測、食変光星の観測などに主に用いられていた。しかしその後天文台周辺の都市化の影響で、精密な光度測定などはわりになったので、そのような観測は岡山あるいは堂平観測所に避難することになった。掩蔽観測は引き続き行なわれている。そのほかには惑星、衛星の写真観測などが最近行なわれている。

往年のスマートな姿も齢不惑ともなれば、鏡筒のペンキがはがれたり、ところどころ傷ができてたりで、よる年並を思わせる。器械部分もかなりガタがきて、早回し機構も使えず、腕力で望遠鏡を目的の星に向けるというありさまである。この重労働のおかげで、寒い冬の夜にも観測者は汗をかきながら仕事をするという余得もある。

中枢神経ともいべき配線系統なども近ごろはたえず故障を起すので、そのたびごとに応急手当をしてきている。何れは大手術を行なうことが必要であろうが、体が大きいだけに簡単にはいかない。関係者が集ってよりよりそんな話し合いも進められている。この伝統ある望遠鏡を今後もいかに活用するかは後に続くものの肩にかかっているといえよう。(古畑正秋)



◇ 2月の日月惑星運行図 ◇

← 明方の空 → ← 夕方の空 →